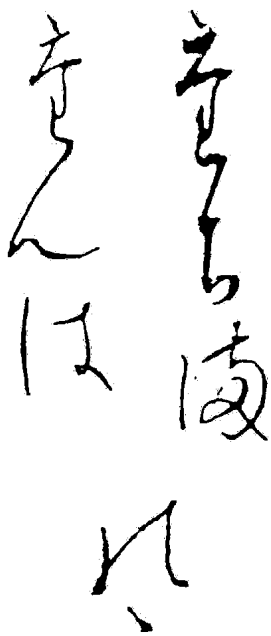
意高度
意味深长

ふるさと うたの風土記



たじま・たんばのうた　―ふるさと うたの風土記―

昭和六十一年三月三十一日発行

編集・発行――兵庫県立図書館（明石市明石公園一―二七）

印　刷――ウニスガ印刷（西脇市和布町三九）

雪の朝

二の字二の字の
下駄のあと

女流俳人　田捨女は
柏原の里に生れた
丹波・但馬の夜空には
澄んだ星のような
句と歌が輝いている

目次

但馬……1
こうのとり・円山川
豊岡市……13
日和山
城崎郡……25
城崎町……27
城崎温泉・二見の浦
竹野町……36
香住町……38
応挙寺
日高町……42
出石郡……47
出石町……49
入佐の山・宗鏡寺・鶴山
但東町……59
美方郡……65
村岡町……67
猿尾滝
浜坂町……73
諸寄・用土
美方町……78
温泉町……81
養父郡……83
八鹿町……85
妙見山
養父町……94
大屋町……95
琴弾山
関宮町……97
氷ノ山

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

朝来郡……101
生野町……103
和田山町……106
山東町……109
朝来町……112
丹波……115
氷上郡……119
柏原町……121
氷上町……123
青垣町……124
春日町……126
山南町……128
市島町……128
多紀郡……131
篠山町……133
藤坂山
西紀町……138
丹南町……138
今田町……139
採録文献……141
但馬の国略図……143
丹波の国略図……145

但

馬

岩つつぢ、山藤咲きて、あら山の、中ゆく旅も、なぐさまれつつ

田山花袋（温泉周遊）

老いぬれば幾山河のしのばれて但馬いとしくなりまさるかな

阪本勝

奥丹後の衣遅ヶ尾山はいよいよに秋の海抽く瀬戸田久日みち

富田砕花（歌風土記・兵庫県）

かきくらし稲田に雨のしぶければ白鷺の群の飛びたちかねつ

斎藤茂吉（白桃）

懸けまくも　あやに畏し　皇神祖の　神の大御代に　田道間守
常世に渡り　八矛持ち　参出来し時　時じくの　香の木の実を
畏くも　遺したまへれ　国も狭に　生ひ立ち栄え　春されば
孫枝萌いつつ　霍公鳥　鳴く五月には　初花を　枝に手折りて
少女らに　裏にも遣りみ　白栲の　袖にも扱入れ　香細しみ
置きて枯らしみ　あゆる実は　玉に貫きつつ　手に纏きて　見
れども飽かず　秋づけば　時雨の雨降り　あしひきの　山の木
末は　紅に　にほひ散れども　橘の　成れるその実は　直照り
に　弥見が欲しく　み雪降る　冬に到れば　霜置けども　その
葉も枯れず　常磐なす　いや栄映えに　然れこそ　神の御代よ
り　宜しなへ　この橘を　時じくの　香の木の実と　名づけけ
らしも

反歌一首

橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し

大伴宿禰家持（万葉集）

考えてみれば淋しき事なりき北に流れてゆく矢田川も

丸山修三（暦日）

白鷺がとどろく雨の中にして見えがくれするさまぞ見にける

斎藤茂吉（白桃）

白雪の降りしく山を越え行かむ君をそもとな気の緒に思ふ

大伴宿禰家持（万葉集）

高山は国を鎮むと雪つもる氷の山ハチ高原瀞川平

丸山修三（雑木山）

但馬糸のよれども逢はぬ思ひをば何のたゝりに附けて祓へむ

（古今和歌六帖）

たぢまぢの手向の神も知らずして袖に霧立つ旅のぬさかな

（忠見集）

立ち別れ君が往さば磯城島の人は吾じく斎ひて待たむ

大伴宿禰黒麿（万葉集）

丹波より但馬に汽車の入りしころ空を乱して雨は降りたり

斎藤茂吉（白桃）

能登川の後には逢はむしましくも別るといへば悲しくもあるか

治部卿船王（万葉集）

山影にむれてやさしき牛の影日鉾が民に帰りけらしな

前田純孝

さび鮎も御供申して出石川

社麦（多地満古里）

但馬路や晴るれば凍る月の冴え

（由人句集）

豊岡の月に出石の灯は視えず

京極杞陽

兵庫讃歌

―いつかきた道への回帰と五弁の花のファンタジア―

丹波・但馬篇

たちばなの木洩れの日はまだささず、
出石の谷々の水の
音立ててたぎりそそぐ蓼の大江。
賭けの裏目を歎くでもなくたたずんだ神。
雪の来日、床尾、大岡はいわずもがな、
氷ノ山、鉢伏、瀞川、蘇武、妙見、三川、大机、神鍋の山々の
頂は
こうのとりの羽毛よりも白い。
たまかぜの北の海に探すいのちの糧、
怒り狂う波濤に素手で立ち向かうのは
はだかる海蝕崖の裂け目の窓々からのぞく気負った漁港。
酷薄な朔風をさえぎる山かげの、ささやかな陰地、
きびしい風土の片隅に、くらしの知恵をあつめ、
気の遠くなる縄文の夢を潜めかくしたまま

それぞれ処を得たありようで、地産地宝に生きる但馬の街村、
集村。
圧し迫る宿命の断層を埋め、排擠を断ち、
明日は背のびせずとも原子力発電の灯を点せよう。

富田砕花

光未だし
―山かげのみち抄

やがて満天の佳気が足音を立てて春分をはこび、
黄道とあって底抜けさわぎの祝祭がもたれ、
地の大円では枝枝に花が咲きにおい……
だが、人間の世界の当為は？

（五つの花びらの
――そのひとひら。）

凍りつく雲を吹き散らしながら、
真ッ平地にのしてくるのは
暗緑色のガラス質の生物をおもわす波濤、
その物憂く、平板で、千遍一律の
それでいて立ち向かうものを圧したおし、
底の知れない力をふるう激情の繰りかえし、
歴史以前につながる長い抑圧に耐えてきた人間の
意欲のとことんしぶとい工作。
そのいけしゃあしゃあと剝き出しの断層が表看板とあって、
こけおどしの扮飾などもちろんなく、夾雑物のない
正真正銘のシベリア気団からのびて、全体が触角さながらの寒
冷路線なのである。
海を渡る途中で水蒸気を吸いこみ、しんしんと雪を降らしなが
ら、
正面切って上陸して来ようという裏日本の
択りに択った場所が
問題の多い対馬海流に洗われる但馬の山地のどてっぱら、
そこの、歯ぎしりする、出入りはげしい海岸線を揺さぶって、
劫初の日から間断なく海蝕が磨崖の群像めがけて
有無をいわさず対決を迫る……
まことに鼻白ませる景観ではある。

溺谷のいくつかが繁栄する港を人間のかぎりない願望をこめて
造成させた。
きびしい風浪をついて港港へ帰投する漁船の群れは
きょうも鮮度と水揚げ高をほこる漁獲物を満載はしているのだ
が、
それでも人人の生活の好転は保証されることはないという。
しかも海へ〝騎り入る〟ことと忍従は根気よくつづけられねば

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ならない、
その宿命は支配的ですらある。

完全にはほど遠いといわれていても、
国には副弐的の取扱いをされがちの動脈の一つに沿い
あるいは毛細血管の端端に根瘤のように寄生する市や、町や、
それらから分蘖する集落や、散居や、
それらすべてには心臓の機能も停滞しがちなのか
脈搏も不整のまま放置されている所見がないでもない診断だけ
がやけに頻繁であるが。

田畑からは米麦をはじめ、根菜類、茎菜類、葉菜類、花菜類、
果菜類のふんだんの収穫が約束され、
蚕はよく上蔟し、
牧野にはたくましい肥牛の群れ、
果樹は季節をあやまることなく結実を遂げ、
森林はその深いふところをひらいて無限の資源の開発をほしい
ままにさせ、
河川はおおむね治められてよく発電と灌漑の重責を果たそうと
し、
人人は黙黙として勤勉を旨として生活の設計と実施に多忙では
あるけれども。

乾燥の不毛への挑戦、
その錬金術もそこからつづく砂丘地帯で
人間の頭脳と労働力が傾倒されてはいる、
いずれは石女の天然記念物が緑の豊饒をもたらす一応の確率は
曙光を見よう。
だが、その実現は明日になるか、
明後日になるか、
あるいはもっと遠い日のことになるか。

きょうは海面に高く波浪が狂い騒いで陰惨な歯並を見せ、
とてつもなく大きな竜骨が黒く、灰色に
太古の日をおもわせてずんぐり背なかをまるめて息づいている。
昼も夜も吹きまくる風のえがく怪異なタッチの風紋は
巨大な動物の無気味な外皮の皺曲へと連想を誘い、
このすさまじい自然の、むしり取られた傷痕に似たものは
北の、そこの海を生活の場とする人人以外には拒否されていて、
おそらくは行旅の人人には厚い垂幕で秘匿された龕ででもあろ
うか。

富田砕花（ひこばえのうた）

郎今去向古因州　　郎は今や古因州に向いて去る
四月氷山冷似秋　　四月の氷の山は秋に似て冷たし

夜半菜油灯火下　夜半、菜油灯火の下に
細縫八木木綿裘　細く縫う八木木綿の裘

志賀重昂

●こうのとり

浅間坂俥にて越え松上の巣ごもり見しは五十年の昔
宿南八重

大空にはばたくことを忘れたる鳥となりつつ滅びむか鸛は
坪内武夫

こうのとり飛び立つ時の羽づくろい見てをればゆゆし羽かがやかす
坪内武夫

こうのとりの大き翼は進美嶺の空翔けて来しわがふる里に
宿南八重

混血の卵は人工孵卵器に入れらるるとふこふのとりあはれ
坪内武夫

死因は老衰を伝ふ夜の間に息絶えてゐし飼育の野鳥
坪内武夫

絶滅を懸念さるるもの鸛二羽つれて低く飛べるはあはれ
坪内武夫

たじまのやく、ひのあとを今日みればゆきの白浜しろくてはみし

道綱（かげろふ日記）

只一羽荒野の冬をさまよふは鶴なりといへど定かにはせず

坪内武夫

天上も下界も汝を容れざるか雛も孵らぬこうのとりあはれ

宿南八重

天然記念物のあはれさよ鶴は人工巣に無精卵を抱く

坪内武夫

農薬は小虫も魚も死なしめて鶴の生態に関はりゆくとか

坪内武夫

山口の鍋鶴の話聞くたびに心寒しもこうのとりのこと

宿南八重

若き日の夢をかづけしこうのとりの老の姿よ我も老いたり

宿南八重

相なれて三日千寿の別か那

松翁

暴風やんで子を呼声や夜の鶴

足立巨山（あだち草紙）

春寒の脚病む鶴の夜啼かな

宿南昌吉

踏青や鶴まひ下る丘の松

宿南昌吉

鶴とんでなにはのさたも松の露

鶴沢清七

鶴の哭く声も美し春の水

足立巨山（足立草紙）

鶴の輪に春の夕月かかるなり

足立巨山（あだち草紙）

鴻ノ鳥

墨絵のような山襞を背に
つややかな絹地の翼に朝日を浴びて
やがて大空に幼と化そうとしている。
農薬で汚れた田んぼにドジョウはいたか
キセルを取出す農夫の憩いはあるか
キャノンネットはやさしい陥穽の投網。
合理化された狩猟本能の飢え。
羽毛は雪のように泥土に散る

風切羽と
自由への飛翔は根元から断たれて
鉄骨のケージの中
飽食と青空との秤の睹け
にぶい牛の去勢と激しい鷹の野性と。
老鳥の決断の無念の血はながされ
かび臭い標本室の剝製
殖えていくその虚ろな目玉の数
おびただしい綿の量が
暗い腹腔を充たす
果汁を吸う姿勢で青空を望んで
首を折って絶命したやつ。

湖水のような純血を守ったが為
異国鳥の太い嘴で突殺されたやつ。

鶴山は聖地エルサレム。
亡郷の民　鴻ノ鳥。
絵ハガキ的視座を唾棄し
祖先の怨念の血汐をめぐらし
その常磐木の樹海のなか
愛と生殖の夢を追う

死にゆく病者の瞳に映る
つり下げられた千羽鶴
その糸を断って変身し
しとど青白い夕陽に染まり
霧の彼方へと融けて行く
雪深い山里の岸に
赤黒い血痕を　押し殺した
〝叫び〟のように残して—

山本孝夫

●円山川

朝来川きのうの淵は今日の町浮き沈みこそ世のならいなれ

作者不詳

いな舟のくたる川せにまかせつゝ水の心に人のこゝろを

沢庵和尚（東海和歌集）

川の中に長く延びたる青葦の州に潜み入る鳰のこゑごゑ

島崎英彦

北ぐにの海に入らむとする川のたゆたふ水に雨さむく降る

前川佐美雄

こうのとり遊べるを見ず低落差の円山川は音なく流る

坪内武夫

さ夜千鳥川より聞こゆ肱つきて四人が筆をとれる灯のもと

与謝野寛

ながながと円山川の流れたる山に緑すわか蘆の原

与謝野寛

西北の方より降りて来しものか円山川に音たつる雨

斎藤茂吉（白桃）

わが汽車に添ひて久しき但馬なる朝来の川に降る春の雨

前川佐美雄（鳥取）

円山川

円山川いずくより来たる
雲烟のかなたより来たる
円山川いずくにゆくや
北海の泡と消ゆなり
母なる大河永遠に流れ
その乳房にぞ人は育ちぬ
流域の人　流域の人
この川に命をよせて
ひたぶるに生きこしものを

朝来　養父の南より
北遠く深き山やま
神鍋の雪　鉢伏の雨
秋草の出石も露も

そそぎ入る天一江

人烟流域に立ちてより
人ここに生れ人ここに老い
生々流転幾千載
白鶴ここに来たりてより
春秋めぐるいくたびぞ
江辺花咲き花散れど
長江とこしえにとどまらず
辺地の人　辺境の人
さちあれと祈りつづけて
鬢辺霜の深を知りぬ

阪本勝（コウノトリ）

舟の船頭衆はナー何を着て寝やる
アー何を着て寝やる　艫を敷き寝に櫂まくら
雨が降りゃよいナーざんざか雨が
アーざんざか雨が　可愛い殿御さんの肩休み

作者不詳

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com